

日本ミュージアム・マネージメント学会 会報 No. 50 Vol. 13 No. 3 2008. 12. 31. 発行



北海道支部研究会



東北支部研究会



応用部門研究会



部門研究会

〈各研究会開催風景〉

9		
À		
ò		
)		
è		
•		
)		

目 次	
【緊急課題検討】	
JMMA緊急課題の検討に向けて	日本ミュージアム・マネージメント学会長 大堀 哲 2
【論考・提言・実践報告】	
コミュニティ・レベルの利用者調査と博物	7館評価のすすめ ~米国でのインターン経験から~
	元ブロンクス動物園リサーチ・インターン 三宅 可倫 4
【研究部会報告】	
基礎部門研究部会 第1回研究会実施報告	;
	基礎部門研究部会長 高安 礼士 8
応用部門研究部会 第1回研究会実施報告	Ì
	応用部門研究部会長 塚原 正彦
【支部会だより】	
北海道支部研修会報告	北海道支部長 土屋 周三、同事務局次長 中瀬 尚子15
東北支部研究会報告	東北支部事務局 向井田善朗 18
【時の話題】	
横浜トリエンナーレ 一クリエイティブシラ	ティ(文化創造芸術都市)を歩く―
	文化環境研究所 山城 弥生 22
【掲示板】	
日中韓博物館円卓会議の開催 (予告)	
1727747 827	90

緊急課題検討

JMMA緊急課題の検討に向けて

会 長 大堀 哲

我が国の博物館は、国や地方自治体等の財政逼迫のあおりの中で、その管理・運営に当たって自己改革、自己改善を余儀なくされている。経営形態は国立の独立行政法人、公立博物館への指定管理者制度の導入などに見られるように、急速に多様化している。また私立博物館も公益法人制度改革への対応が緊急な課題になっている。

一方、先の博物館法改正で積み残しされた重要な問題・課題に対して博物館界は何をするのかも問われる状況にある。当然、博物館界全体としてその解決に向けた取り組みが必要であるが、その核となる体制がないからといって看過しているわけにはいかない。JMMAの率先垂範が求められていると考える。

そこでJMMA緊急検討課題を、①博物館政策・経営、②博物館評価、③博物館国際化、④博物館人材育成、⑤博物館専門職行動規範・倫理の5つに整理し、検討チームを設置して進めることにした。これらの5つの課題は、我が国の博物館が直面する問題・課題であり、今後の方向性を緊急に検討しなければならないものである。

各検討チームには主査、副主査をおき、適宜、主査から検討メンバーをよびかけていただくこととしているので、積極的に参加をお願いしたい。なお、それぞれの検討チームは20年度から21年度中のできるだけ早い時点で、一定の検討のまとめがなされるよう期待しているところである。

①博物館政策・経営検討チーム

②博物館評価検討チーム

③博物館国際化検討チーム

④博物館人材育成検討チーム

⑤博物館専門職行動規範・倫理検討チーム

主查:高安理事 副主查:鷹野理事

主香:高橋理事 副主査:水嶋理事

主査:水嶋理事 副主査:山下理事・高安理事

主査:塚原理事 副主査:土井理事・松永理事

主査:川津理事 副主査:齊藤理事

「博物館政策の形成に関する検討部会」 について

高安 礼士

本部会はこれらの共通テーマである「日本における博物館の現状と課題」「社会的な役割の変化」等を踏まえて、博物館の国段階や都道府県段階の政策や博物館経営の今後の在り方を提言するものです。既に、JMMA設立十周年を迎えるに当たって、「JMMA構想将来検討委員会」が設置され、さまざまなテーマについての検討が行われています。それらの成果を踏まえて、「博物館の社会的役割」「博物館経営の課題と方向」「博物館の登録制度」「学芸員制度」「今後の日本の博物館の方向」等について「博物館政策

の形成に関する提言 | として検討します。

今後の予定としては、2009年1月末までに「中間まとめ」を行い、その後「ネット公開と意見集約」を2009年2月~3月に行いいます。更に2009年3月末に最終案を策定することを予定しています。皆様のご意見を期待いたします。

博物館評価検討チーム

高橋 信裕

博物館評価の在り方について、これまで討議、検 討されてきた成果を検証し、それらをベースに実効 性のある、具体的かつ柔軟性の高い評価手法と内容 を提案する。 例えば、評価の対象も設置者を対象とした指標と 内容、オペレーション現場を対象とした指標と内容 など、現状とリンクした評価手法の確立が求められ る。同時に、これらの評価方法を誰が、どのように、 どのような時点で行うことが理想であるか。特に市 民社会の成熟に寄与する社会的な施設、機関である 博物館にあっては、利用者や市民の参加による点検 と評価、そしてその仕組みの構築と定着が課題となっている。以上の観点から、検討し、提言するもの とし、最終目的は、この手法が、博物館界や地域社 会で共有化され、一つのスタンダードとして機能す るものにしたい。

博物館国際化検討チーム

水嶋 英治

我が国の博物館は諸外国の博物館と個別に交流をおこなっているが、我が国の博物館の国際化および活性化を促し、博物館界全体の国際化を図るためにはどのような問題点があり、どのような方策で進めていけばよいのかを検討する。

その際、国際化を検討する際のレベルには、国レベル(政府間対話)、博物館界レベル(協会、学会)、個別の博物館(博物館同士の交流)、専門職(個人)レベルなど、幾つかの段階があることを考慮に入れて、各レベルでの問題点の整理と諸課題について検討する。

欧米のみならず、アジア諸国の博物館との連携・協力を視野に入れつつ、2009年2月に開催予定の日中韓博物館円卓会議や2009年秋に開催が予定されているICOM-ASPAC国際会議の場を通して、諸外国の博物館研究者との意見交換や情報交換をおこない、博物館研究をはじめ博物館の国際化について検討していきたい。

博物館人材育成検討チーム

塚原 正彦

生涯学習社会の進化し、キャリア社会への移行が 急速に進んでいます。教育や文化の専門機関である ミュージアムにかかわるあらゆる人々には、資質を 磨きあげ、限りない成長を続けていくことが求めら れています。

しかしながら、わが国では、大学生を対象とした

学芸員などの養成制度はあるものの、すでにミュージアムにかかわり学芸員として活躍している、あるいは、学芸員的な仕事を実践している人々について、その資質や能力についての評価する基準は設定されていません。それゆえ、ミュージアムに携わる人々の学習の経過を記録する制度や仕組はなく、キャリア支援を前提にした教育研修の課程すら存在してません。

ミュージアムにかかわる一人ひとりの人々の資質 や能力を高め、キャリアを支援していくことこそが、 ミュージアムに活力を与える最善の施策であり、そ れを推進するための制度設計や支援体制を構築する ことは緊要の課題となっています。

以上のような問題意識にたち、ミュージアムにかかわる人材養成システムを再検討し、学芸員等の資質と学習歴の評価基準を設定し、キャリアアップをはかるためのカリキュラムに取り組み、教育・研修事業を全国展開していくことを目指しています。

今後の予定としては、2008年度に、ミュージアム 人材の資質とキャリア評価の枠組みを設定し、教育 課程の構築に取り組み、2009年度に評価、研修事業 の試験的実施を目指しています。

博物館専門職行動規範・倫理検討チーム

齊藤 恵理

指定管理者制度の導入、博物館法の改正等、博物館をとりまく社会環境は大きく変化している。そうした中、各博物館において、博物館専門職員の行動規範や倫理意識のあり方を今一度見直すことが、重要な課題となってきている。こうした観点から、我が国の博物館における行動規範や倫理意識の現状を概観するとともに、海外における先進事例等を参考としながら、我が国における博物館専門職員の行動規範や倫理規定のこれからのあるべき姿を検討し、最終的には、ガイドラインとして提言していくことを目指したい。

具体的には、第一段階として、我が国における博物館専門職員の行動規範・倫理規定における現状調査、海外の先進事例の調査を行い、第二段階として、我が国の博物館事情に相応しい、博物館行動規範・倫理規定のガイドライン素案の構築に取り組むことを検討したい。

論考・提言・実践報告

コミュニティ・レベルの 利用者調査と博物館評価のすすめ ~米国でのインターン経験から~

元ブロンクス動物園リサーチ・インターン 三宅 可倫

コミュニティ・レベルで市民との関係を分析する ことが、ミュージアムの発展につながる風穴になる かもしれない。今、そんな予感がしている。読者の 皆さんの中に、より多くの利用者と市民に自館で充 実した経験をしてもらいたいと願って努力している ものの、手詰まりを感じている方はおられるだろう か? そんな皆さんにお尋ねしたい。皆さんのミュ ージアムでは、利用者調査や博物館評価に取り組ま れておられるだろうか? Yesと答えた方は、実際 に来館した利用者を対象とするものにとどまらず、 地域コミュニティなど広い範囲の市民を対象にした 調査と評価を行っておられるだろうか? 本稿では、 筆者の米国でのインターン経験をもとに、コミュニ ティ・レベルで市民との関わりを探る利用者調査と 博物館評価の重要性を示し、ヒト・モノ・カネが厳 しくとも実行できる方法についても触れてみたい。

1. 発展のために:コミュニティ・レベルで市民との関係を分析する

余暇時間の過ごし方をめぐる数多くの選択肢から、 自館(園)を選んで足を運んでくれた利用者の調査 が重要なことは言うまでもない。どんな人たちか。 ミュージアムをどのように利用し、どのような経験 をしたのか。展示内容やプログラムはどのように受 けとめられたか、メッセージは伝わったか。施設・ サービス面での満足はいったか、等々の切り口で現 状分析し、改善につなげているミュージアムは多い ことだろう。

しかし、ミュージアムの持続的な発展を目指すならば、それだけでは足りないのではないか。コミュニティ・レベルで市民との関係を分析することがどうしても必要となると考える。理由は二つあって、

一つはマーケティング的な理由、つまり、利用者拡 大のためで、ここに(非)利用者調査が有効に働く。 一般に、ミュージアム利用者の中心は近隣を含めた 地域住民である場合が多く、ミュージアムの応援団 であるボランティアや会員も地域住民の占める割合 が高い。その一方で、地域住民の多くは利用者では ない。つまり、地域は、潜在的利用者を大勢抱える 開拓しがいのあるマーケットである。そして、地域 住民の場合、いったん気に入れば、近接性のメリッ トからリピーターになる可能性も高い。よって、潜 在的利用者を包含する地域住民の特徴や傾向、ミュ ージアムへのニーズを理解することが大事になる。 この潜在的利用者については、来場した利用者の調 査からもその属性がおおまかにはわかるが、来ない 理由あるいは来なくなった理由、関心テーマや余暇 の過ごし方など、将来の利用につながる貴重な情報 は、コミュニティ・レベルでの調査によって明らか になる。調査結果をどのように生かせるのか、具体 例があった方がわかりやすいだろうか。これは事例 ではなく、通っていた米国の大学で非常に人気のあ った物理のクラスからヒントを得た私のアイデアだ が、例えば、10代後半から20代にかけての若者の利 用が少なく、この層の利用拡大を図りたい科学博物 館があったとする。このグループについて調査デー タにあたると、スポーツに関心を寄せ、余暇時間も スポーツ観戦や自分がスポーツすることにあててい る人が多いとわかったとする。そうすると、自館の 物理の展示に結びつけた「科学を味方に強いアスリ ートをめざそう~スポーツを科学する~ | といった キャッチフレーズで、ターゲット層の関心に引き寄 せたプログラムをつくることができる。このとき、 データがこのグループの休日のスケジュール・パタ ーンを把握していれば、日時設定の面からもより効 果的に人集めができるというわけだ。

さて、コミュニティ・レベルでの市民との関係の 分析が大事であるとするもう一つの理由は、地域社 会との良好な関係構築のため、あるいは説明責任を 果たすためで、こちらの分析は博物館の検証・評価 という性格を持つ。公立ミュージアムの場合は税金 を通して地域社会とその市民に支えられているが、 財源に限らずとも、人材や利用者の往来などを含め てミュージアムが地域社会にお世話になっている部 分は大きい。自らが拠ってたつ地域社会とその市民 に、ミュージアムがどのような価値と役割を持つの か探り、現状を検証することは、ミュージアムをめ ぐる社会環境が厳しくなるなか、今後、ますます求 められていくと予想される。

コミュニティ・レベルの分析からみえてくる市民 のニーズ、ミュージアムの現状と課題は、行動計画 のみならず、ミュージアムの使命の再確認や長期的 目標づくりに反映させることができる。調査の結果、 市民のニーズとミュージアム側の提供物とがずれて いることが判明するかもしれない。そのギャップに どう対応していくか、議論を始めるなかでミュージ アムが動き出す。コミュニティ・レベルの調査と評 価は、運営改善に資するばかりでなく、市民と共に 存在していこうとする姿勢を地域社会に示すチャン スともなる。これまで、ミュージアムでの市民参加 の機会は非常に少なかっただけに、調査と改善のプ ロセスをできるだけオープンにすれば、市民の側の 関心や期待が高まり、新しい関係づくりも始められ るだろう。ミュージアムが地域の市民のニーズを掴 み、利用しやすい環境を整え、ミュージアムの改善 を続けるうちに、利用者が増え、リピーターもサポ ーターも増え、地域社会や市民との持続的な関係が 生まれ、ミュージアムが発展に向かう、と考えるの は楽観的すぎるだろうか?

2. 市民を重視する意識と適正な調査手続きへのこだわり ~米国の利用者調査と博物館評価から~

私が上述のような考えを持つようになったのは、 一昨年前、米国で利用者調査と博物館評価を経験し てからである。当時、現地で社会学の修士課程を終



BRONX ZOOの看板をバックに。筆者

えたところで、知り合いのつてでブロンクス動物園 の調査プロジェクトに誘われ、リサーチ・インター ンとして半年間働いた。社会学のバックグラウンド と社会調査の知識、とくにデータ分析と統計のスキ ルで、調査に貢献してほしいとのことだった。

ブロンクス動物園はWildlife Conservation Society という歴史ある環境NGOが運営する、世界的にも 有名な動物園である。利用者調査及び博物館評価は、 米国の動物園コミュニティにおいてこの分野を牽引 してきた人物を中心に精力的に実施されていた。当 時、山ほどの調査と評価が同時進行しており、利用 者や市民と園との関係をミクロからマクロまであら ゆる位相で探る徹底ぶりだった。私が関わったもの だけでも、新規展示のポスターの評価から総括的評 価、設備やサービス部門の満足度調査、集積した属 性調査の比較分析、会員のニーズ・満足度調査、ボ ランティアのヒアリング、地元コミュニティでのヒ アリング、過去に実施された電話調査による近隣住 民のマーケティング調査の再分析、動物園・水族館 の存在意義と役割を検証する全国規模の共同研究ま でと、幅広い。

印象的だった点は、スタッフの意識が、実際に足を運んだ利用者にとどまらず、市民と地域社会にまで向かっていたことだ。定期的に近隣住民を対象としたマーケティング色の強い利用者調査を実施しており、必要に応じてデータを引っ張り出し、「○○のグループの園の利用頻度は高いか・・・」などと仮説の検証をいろいろに試みる。よりマクロなレベルで継続的に集めた非利用者や一般市民のデータがあるからこそ、それを基盤に、潜在的利用者の関心や行動様式などの傾向と展示を結びつけたプログラムを開発でき、利用者の掘り起こしがやりやすくなる。

マーケティングの視点とは別に、地域社会との関係性を重視する立場から、地域社会における園の価値や役割を探り、現状を検証する試みも行われていた。例えば、ボランティアに活動を始めた動機や継続する理由を問い、ボランティア活動をする市民に園が何を提供できるのか探る。また、地元の教育関係者が園にどのような仕事を期待しているのか尋ね、そもそも、子どもたちやその親たちがどんな生活を送っているのかについても、理解を深めようとする。また、地元住民は園にどんな印象を持っているのか、



楽しげな子どもたち: 身近な自然とのつきあい方をテーマとした展示には ハンズ・オンの工夫がたくさん

地域の政治のリーダーたちは園をどう評価している のか尋ね、地域社会における園の姿や価値と役割を 浮かび上がらせる。

来場した利用者の調査も、もちろん大事にされている。しかし、それだけではわからない非利用者や一般市民の傾向を知るために、コミュニティ・レベルの利用者調査が実施され、一方で、地域社会との関係を大事にする立場から、地域での自園の検証が行われる。包括的な利用者調査及び評価の根底に市民を重視する意識があるのだ。

しかし、このような包括的な調査及び評価も適正 に行われなければ意味がないどころか、害にもなる。 そして、貴重な資源と機会の無駄遣いとなる。ブロ ンクス動物園ではどうであったか。いやはや、調査



"コンゴのゴリラの森"の展示はいつも人気

手続きへのこだわりもスーパー級で、あくまでも適 正な社会調査法にのっとってデータを収集・分析し、 客観的な事実に迫ろうとする。調査設計段階におい ては、調査対象、サンプル数や抽出法、調査対象に 調査実施を事前に知らせるか否か、などデータ収集 や分析の手法を設定し、役割分担やスケジュールな どを確認する。調査票づくりにあたっては、自記式 か他記式か、質問項目の文言や順番、回答選択肢な どを吟味する。調査対象が家族などのグループの場 合には、強い発言者の意見にグループが支配されな いよう、誰から質問を始めるのか、また、調査対象 者への目線の送り方についてまで確認するなど、適 正なデータ収集のために細部まで注意を払う。デー タがあがってきたら、数量分析の場合は表作成のみ では終わらず、統計的検証まで試す。よく「統計的 に有意? | と聞かれたものである。質的分析も大事 にしていて、ヒアリング調査の例で言えば、自由返 答してもらった内容をすべてテープから起こし、キ ーワードをつけてコード化し、体系的に整理してい くというグラウンディッド・セオリーのアプローチ で厚みのある分析に取り組んだりもする。しかし、 内部に調査法の専門家はいないので行き詰まること もあるが、そうしたときは、連携する大学の社会調 査センターに調査手法を確認したり、分析案や調査 票の提案を出してもらったり、実際の分析を依頼す ることもある。こうした適正な調査手続きへのこだ わりが、調査結果の客観性を高め、関係者間での事 実認識の共有をスムースにする。付記すべきは、こ うした自園の調査実施の裏で、他ミュージアムでの 調査についても勉強し、加えて、理論とのすりあわ せも進めていたことだ。当時、園が、動物園・水族 館の価値と役割を検証する共同研究のまとめ役をし ていた事情もあり、関連論文の要旨集を作成し、重 要テーマについては精密な文献レビューを行ってい た。私も一つのテーマを担当したが、理論と実践を 往復することで仕事の質が高まることを実感した。

市民を重視する意識のもと、市民や地域社会と園との関わりを利用者調査と博物館評価の両面から明らかにする。適正な手続きにこだわりデータに客観性を与える。これらの姿勢が両輪となって、ミュージアムの持続的発展に資する価値ある情報を取り出すことが可能となる、と学んだブロンクスでの経験

であった。

3. 日本のミュージアムの未来のために

さて、日本のミュージアムに話を戻すが、皆さん は、その未来予想図をどのように描いておられるだ ろうか? 私はミュージアム内部の人間ではないの で内発的な動きについてはわからないが、ミュージ アムの外部環境についてみれば、当分の間、財政事 情が厳しいことは疑いない。また、ミュージアムへ の社会の要請が多様化していく一方で、運営面でも 成果物についても、ミュージアムを見る社会の目は 厳しくなっていくだろう。そうしたなかであっても、 ミュージアムが自らの存在意義と果たしている役割 を社会に認めてもらうよう努力を続ければ、休止・ 廃止といった残念な結末は避けられるのではないか。 これもまた動物園の例になってしまうが、北九州の 到津動物園のように、経営母体の地元企業が経営難 のために廃園したが、市民による存続運動が盛り上 がり、市が引き継ぐ形で再開園させたというケース も知られている。

確かに、ミュージアムの成立過程も取り巻く制度 も、そもそも、そうした仕組みの根底にある社会関 係のあり様についても、米国と日本とでは異なる面 が多い。また、本稿で事例に扱った動物園と他分野 のミュージアムとの違いもあるので、ここに紹介し たアプローチがそのまますべてのミュージアムに通 用するとは思わない。しかし、市民の余暇時間をめ ぐって厳しい競争を続け、寄付者や地域社会から説 明責任や社会貢献を求められてきた米国のミュージ アムが築きあげてきた市民との関係性、そして、そ の取り組みの果実である利用者調査及び評価のあり 方は参考になるのではないだろうか。

4. ヒト・モノ・カネが厳しくても

そうは言っても、うちではそんなことする余裕は どこにもないよ、というのが皆さんのご感想だろう か。そこをなんとか乗り切れないものか。厳しいと きだからこそ、調査によって得られた正確な情報の もとに、どこに、どのタイミングで、その限られた 資源を投入するのか、綿密に戦略をたてることの意 味が大きいのである。まとめの代わりに、ヒト・モ ノ・カネが厳しくてもどのように調査及び評価に取 り組めるかについて触れてみたい。

目的や調査対象の母集団、調査手法によって、調 香サイズ (サンプル数) やデータ収集及び入力、分析 にかかる労力が大きく異なってくるので、目的や条 件と整合する範囲で取り扱いが可能な形にプロジェ クトを設計しておけばよい。オープンになっている 調査事例は参考になる。体制については、調査の専 門職を内部に置く余裕がなく、又、調査全てを外注す る予算がなくとも、次のように取り組むことができ るだろう。スタッフが研修を受けて、調査をリードし ていけるよう必要な社会調査や統計の知識をつけて おく。ついでに、SPSSなどの統計分析ソフトを覚え てスタッフが分析もカバーできるようにする。専門 性の高い事柄については、外部の研究者や大学機関、 調査の専門家の協力を得た方がよいだろう。ボラン ティア、会員、学生、市民から有志を募って、調査チ ームを立ち上げる。データ収集や入力作業はとりわ け労力がかかるので人手はあった方がいいが、こち らも研修が必要な部分がある。各ミュージアム単位 で動きがとりづらければ、県や市などの行政単位あ るいは周辺のミュージアムから募って共同調査とす ることもできる。他館との協働は労力と費用の軽減 になる上、学び合いにもなる。同じ質問項目を入れて おけば調査結果の比較が可能となり、自館の特徴が はっきりするという利点もある。答える側も、何度も 時間をとられずに済む。また、マス・メディアは調査 に慣れているので、地元新聞社等の協力を仰ぐこと も考えられる。できることはたくさんありそうだ。

ミュージアムの持続的発展のために、コミュニティ・レベルの利用者調査と博物館評価が有効ではないか。コミュニティ・レベルでの市民との関わりの分析が、利用者拡大、そして地域社会との良好な関係を築くことにつがなるからだ。状況が厳しくとも、これに取り組む方法はありそうだ。ご一考いただければ幸いである。

参考文献

村井良子編著『入門ミュージアムの評価と改善』 アム・プロモーション

フィリップ・コトラー/ニール・コトラー著 井関 利明/石田和晴訳 『ミュージアム・マーケティング』第一法規

基礎部門研究部会

第1回研究会 実施報告

テーマ:サイエンスコミュニケーションと博物館の役割

日 時:2008年11月6日(木) 14:00~17:00

会 場:国立科学博物館 地球館3階 講義室

報告者:高安 礼士(基礎部門研究部会長)

1 開催テーマと開催の趣旨等

(1) 開催のテーマ

「サイエンスコミュニケーションと博物館の役割」

(2) 開催の趣旨

博物館経営の困難さが増す中、様々な取り組み博物館職員の工夫で行われてる。結局のところ博物館は人であるといわれ、博物館経営に占める人材育成の重要性が認識されている。また、指定管理者制度が始まり、博物館職員の育成は緊急の課題となり、博物館法の見直しの中で学芸員制度の見直しも行われている。このような状況下で、これまで日本ミュージアム・マネージメント学会では、「ミュージアム・マネージメントの再構築」と題した最終実施年として、今日的な博物館経営の課題とそれらに対応できる人材の育成について「博物館の課題と人材育成」に焦点を当て、成功事例に学び将来を見通すこととした。

今回の研究会においては、アメリカ歴史博物館で 長年シニアキューレーターとして活躍してきた Dr. Bernard Finn氏をお招きして、スミソニアン博物館における最近の展示や科学教育の動向を紹介して頂くことにより、「21世紀における科学博物館の在り方」や「学芸員の専門性(科学コミュニケータ)」について議論を深めることとした。

(3) 国立科学博物館サイエンスコミュニケータ養成 実践講座(以下、SC) 主催事業

2 開催日時・場所・参加者

(1) 開催日時 平成20年11月6日(木)午後2時~午後5時

(2) 開催場所 国立科学博物館 地球館 3 階 講義室 (東京都台東区上野公園 7 -20)

(3) 参加者 45名 (SC2008 受講生12名)

3 実施内容

(1) 主催者挨拶:

前田克彦展示・学習部長から、国立科学博物館の 展示・学習支援事業の大きな柱の一つとして、49大 学が入会をしている国立科学博物館大学パートナーシップ制度の一貫として実施しているサイエンスコ ミュニケータ養成実践講座の紹介があった。

同大学パートナーシップ制度に基づいて平成19年度は42大学の学生18,815人が入館し、その他、教育事業として博物館実習生の受け入れ、大学生のための自然史講座、大学生のための科学技術史講座などがあることが紹介された。



(2) 開催の趣旨:

小川義和展示・学習課長から、サイエンスコミュニケータ養成講座の一環として実施する本講義の趣旨と「サイエンスコミュニケータ」に関する基礎的な情報が提供された。

タイトルの「科学博物館と大学の連携によるサイエンスコミュニケータ養成の現状と課題」は、国立科学博物館と大学が連携して2006年からサイエンスコミュニケータの養成を始めてから課題として認識している「21世紀を豊かに我々が生きていくためにどうしたらいいか」「現代社会における科学の在り方が問われている」の二つに関する詳細な説明があった。特に、1999年のブダペストの世界科学会議の提言にある「社会のための科学」「社会における科学」という観点からサイエンスコミュニケーションという必要性がある、ことなどが紹介された。

(3) 講演者紹介:

日本ミュージアム・マネージメント学会高安礼士 理事から、Bernard Finnさんはコーネル大学を御卒 業後ウィスコンシン大学で科学史を専攻されてドク ターを修得し、スミソニアンにおいては、1962~ 2005年の40年間にわたってアメリカ歴史博物館の主 任研究員であることなどの紹介があった。(別添英語 資料参照)

Bernard S. Finn

Smithsonian Positions:

Curator Emeritus 2005—
Curator, Electrical Collections 1962—2005
Department Chairman 1969—72, 1978—83

Education:

BEP, Engineering Physics, Cornell University 1955 PhD, History of Science, University of Wisconsin 1963

Positions in Professional Societies (selected):

Society for History of Technology (formerly executive council, member of committees)

History of Science Society (formerly executive council, member of committees, managing editor of Isis for 15 years)

Institute of Electrical and Electronics Engineers (formerly member of History Committee, editorial board of Spectrum)

Artefacts (co-organizer, co-editor of publications)

Exhibits (selected):

2001 "The Underwater Web: Cabling the Seas"

2000 "Lighting a Revolution" revised, with Hal Wallace

1990 "Information Age" (with David Allison, Jon Eklund, Steve Lubar)

1986 "Edison after the Electric Light: The Challenge of Success" (with Joyce Bedi)

1985 "The Laser at Twenty—Five" (with Robert Friedel, Alan Morton, Elliot Sivowitch)

1979 "Edison: Lighting a Revolution" (with Robert Friedel)

1973 "Leave It to the Mermaids" (Science Museum, London)

Books (selected):

Artefacts: Studies in the History of Science and Technology, co—editor of series, 1999—. Principal editor of three individual volumes.

History of Electrical Technology: An Annotated Bibliography. Garland Press, 1991.

A Retrospective Technology Assessment: Submarine Telegraphy, with Vary Coates, et al. San Francisco Press (1979).

Development of Submarine Cable Communications, NY: Arno Press (1970).

今回の講演に先立ち、

- ・科学技術博物館の展示の段階:第一段階として「ものそのものの展示」、第二段階は「歴史上の人物にかかわる展示」(例えばエジソンにかかわる物語)、次の第三段階には「社会とのかかわりという展示」という3つの段階があること
- ・産業技術史博物館の発展の段階:「17~18世紀の 頃の小さなキャプションと共に行われるは珍しい 物の展示(キャビネット型展示)」「産業技術史そ のものを体系化して示す展示」「サイエンスセンタ ーの科学の原理の展示」という3つの段階がある こと

が紹介された。

(4) 基調講演 (要旨)

元スミソニアン・アメリカ歴史博物館上席研究員 Dr. Bernard Finn氏

①スミソニアン機構の歴史

19世紀初頭、イギリスの科学者 James Smithson は 遺産を残した。その50万ドル以上の Smithson の遺産 をアメリカ議会が受け継ぎました。米国議会は3年 間話し合いを続けて、最終的にこの遺産を受け入れ、8~9年かかってこの遺産を使って何をするかという話し合いの後にJoseph Henryを事務長として、この遺産の使い道を考えさせた。1846年にスミソニアン機構を設立して、ワシントンのモールにスミソニアンのキャッスルと呼ばれる本部のビルが建てられた。

②私の経歴とサイエンスコミュニケーションの関係 (歴史的観点の必要性)

大学で物理学と歴史学を学んだ後、1962年にスミソニアン機構に入り、1964年の開館の歴史技術博物館は1980年にアメリカ歴史博物館となり、その博物館で社会とかが宇技術の関わりを「情報化時代」の展示を担当した。

③科学博物館の歴史的経緯

16世紀のヨーロッパで始まった貴族のコレクションを展示する科学技術博物館は、その後万国博覧会の資料を展示するようになり、太平洋対戦後は各国の科学技術教育を考慮したサイエンスセンターが作られ、1987年、アメリカ科学振興協会は科学に関す



る一般大衆の理解についての賞を制定され、また、『Public understanding of Science』という名前の雑誌が1922年に発刊された。こういった例からも見られるように、一般大衆の科学技術に対する関心が非科学技術博物館が実際に一般大衆の科学理解に役立つし、そうならなければならないと思う。科学それ自体よりは科学技術の影響が非常に重要なトピックスだと思いますので、スミソニアンではそれを基軸として考えている。実際に博物館は歴史的に科学技術がどういったものだったかということは説明してきたが、その影響についてはなかなか取り上げられなかった。特に科学博物館はサイエンスセンターになって、標本は倉庫にしまってしまう。また、いろいろなもの(博物館資料)をWeb上にインターネッ

ト上で公開しているが、新しいビジョンを考える上 で標本自体に語らせることに余り気を遣っていない が、標本を見ればわかるというのも非常に重要な概 念である。学校や社会との橋渡しを行うコーディネ ーションも重要である。歴史学会も、皆さんのプロ ジェクトから学びたいと考えるであろうし、他の立 場の人々も同じようなことができるプログラムを持 っている。博物館の人間はそれほどお互いに対話を していない。私は他の博物館の皆さんとよく話をす るが、私の今までの経歴の中でそれは非常に重要な ことで、学会やサイエンスセンターで皆さんと頻繁 に会って、我々の博物館ではこういったことをして いる、なぜそうしているかということを話し合うこ と(「つながる智」)が非常に重要になってくると思 っている。これは今後も行われていくべきであると 思う。

(5) パネル討論(科学博物館と博物館職員の専門性をとりまく現状と課題)

会全体の進行を亀井修ボランテイァ活動・人材育成 推進室長がおこなった。この部分では、まず、パネ リストの三名からの「博物館と万国博覧会の開催の 関係」「歴史博物館と科学系博物館の融合」「学校教 育に不足する科学技術に関する歴史的観点の重要性」 について補足説明があった。

Museum Roles in Public Understanding of Science

Bernard Finn, Curator Emeritus, Smithsonian Institution

Abstract

Although "public understanding of science and technology" can be considered a 20th-century construction, the concept for museums has roots in the 16th century. At that time the audience was typically confined to friends of the owner of the collections or perhaps to his students.

The great exhibitions of the 19th century gave rise to a number of national museums of science and technology with much larger ranges of visitors. Their goal, however, was more to extol the marvels of science than to promote its understanding. Significant museums of natural history also developed in this period, organized first around Linnean and then Darwinian principles.

At the beginning of the 20th century the Deutches Museum, in Munich, set a standard for museums of science and technology. In its displays one can find elements of the major trends that followed—especially the use of objects as historical icons and the development of interactive exhibits.

The early 20th century also saw the emergence (mainly in academic circles) of an interest in public understanding of science, an interest that expanded rapidly after World War II.

After the war two dramatic changes took place. One was the development of non-historical (and non-collections-based) science centers, formed for the expressed purpose of promoting public understanding of science and technology. The other was the employment of trained historians as curators in the technical museums, which had the unanticipated result of causing these museums to emphasize the understanding of social consequences of science and technology and not of the disciplines themselves. The Smithsonian provides an especially strong example of this trend.

An argument is made that now, in the 21st century, we need museums that will use their historical collections to help visitors to understand the nature of science and technology—how things work and how they developed over time, how they have been influenced by society as well as how they influenced society.

以下参加者の質問、意見とその回答等の主なもの を紹介する。

(質問・意見1)

サイエンスコミュニケーターの役割として、「外 部資金導入」や「政府へのロビーイング」「政治や 宗教活動との関係」等をどのように考えるべきか? (回答)

サイエンスコミュニケーターの役割として、「外 部資金導入」や「政府へのロビーイング」「政治や 宗教活動との関係」等をどのように考えるべきか? (回答)

国内の事情については小川氏から、「博物館は公共性があるがやはり政治的な存在の側面がある。」、高安氏からは「外部資金導入には公務員としてのさまざまな知識やスキルが必要」との回答。アメリカの事情についてはフィン氏から、「アメリカでも、政治的な圧力や公務員の不正などが問題になっている。特に環境的な問題について、空気清浄法とか政府が執行しようとしている規制、あるいは科学者が書いた記録がホワイトハウスによって書きかえられるという問題があった。しかし、これから新しい時代が動こうとしているので、大きな変革が起こることを期待しています。」とのコメントがあった。

(質問・意見2)

展示をヒストリカルにアプローチして紹介するとかの「科学技術と社会とのかかわりとしての博物館という役割」をもう少し詳しくお聞かせください。また、スミソニアンの自然史博物館に「オーシャンホール」という展示があるが、日本の博物館との連携などは考えられないか。

(回答)

高安氏から、「科学技術と社会の関わり」の分野では、学校教育とかなり価値観の違いがあり、今後も双方の努力が必要で、現に国立科学博物館でそのような教育プログラムを作成中であるとの回答があった。小川氏からは、そのような意味からも「科学技術リテラシー」や「歴史を含む文脈に基づく科学教育」の重要性が指摘された。また、スミソニアン等との連携については、フィン氏から実務上は個人ベースの連携の重要性が紹介された。

(質問・意見まとめ)

- ・科学技術の振興の目的は何か
- ・300年後、400年後の私たちの持っている科学技術はどのように評価されているか?

- ・「科学」の背景なども学べる教科学習の在り方は どうすべきか?
- ・アメリカでは市民と博物館が大変近いという感じを持った。今後の日本の博物館の運営についてどう考えればよいか。

(回答)

高安氏からは、「市民と博物館の近さという点では必ずしも日本が遠いと言うことではなく、アメリカでも過去においては博物館は中流家庭の男性のものであった、とフィンさんが言っていた。少しいい加減な日本の博物館の運営にも良い点があるという人もいる。今後は、財政事情や国民の考えかた、国際的な基準をにらんだような改革が必要である」とのコメントがあった。

小川氏からは、「サイエンスコミュニケーション」は手段であって、目的をはっきりされることが必要である。アメリカにおいて「実感する化学」と言う教科書が出版されているが、このような科学技術リテラシーを育成する方向も目的の一つになりうると思う」との意見があった。

フィン氏からは、「サイエンスコミュニケーションは、メッセージを明確にすることが大切であり、博物館で行う場合には単なる価値の伝達ではなく海を紹介する場合でもギリシャ時代の芸術品を含めて紹介するなど、複合的・総合的な博物館ならではなお紹介の仕方があるはずで、そのためのも我々博物館人が連携することが必要になっている」などの意見が紹介された。

最後に、国立科学博物館の前島研究員から、今 もなお変化するものとして「博物館資料の価値の 認識」の必要性が強調された。

最後に国立科学博物館前田部長から「科学博物館として、取り組むべき方向性」とフィン氏への感謝の言葉が述べられ、研究会・講座が終了した。



応用部門研究部会

第1回研究会 実施報告

テーマ:産業文化を未来に継承するミュージアムプロジェクト

―鳥山和紙のミュージアム・マネジメントに学ぶ―

日 時:2008年10月25日(土)

会 場:栃木県那須鳥山市

報告者:塚原 正彦(応用部門研究部会長)

2008年10月25日(土)に、栃木県那須烏山市で、「地場産業のミュージアム・マネジメント」というテーマで、1968年の開設以来、和紙の文化を継承し、地場産業としての地位を確立することに成功した和紙会館のミュージアム・マネジメントに焦点をあて、フィールドワークを中心とした研究会を実施した。

1 文化と経済に引き裂かれた地域資源

いま全国で、地域資源にまなざしが向けられている。そして地域ブランドや観光立国などの施策が推進され、それを保存し、活用するプロジェクトが展開されている。

それには、これまで2つのアプローチが展開されてきた。

第一は、地場産業や地域の文化が持つ文化財としての価値を活かして、それを展示したり、建造物などは文化的な施設として活用したりすることで、学習や集客施設として発展させることである。

第二は、経済産業省などが主導して全国で展開している地域ブランド事業である。衰退しつつある地場産業や地域の文化に、ブランドビジネスのマーケティングやセールスプロモーションを導入することで、ビジネスとして再生を目指すことである。

第一のアプローチでは、文化の価値は、展示や建造物として遺されるかもしれないが、集客施設として維持することは困難をきわめ、多くの自治体にとってお荷物施設となってしまっているのが現実である。第二のアプローチでは、もともと金銭価値を超える志や技を中心に継承されてきたシステムをビジネスモデルに応用することがミスマッチであり、話題づくりのプロモーションをのぞいて、成果をあげた事例は多くはない。

2 地場産業のミュージアム化

私たちは、文化財とビジネス化とは異なる第3の アプローチとして、地場産業のミュージアム化を提 案したい。 それは、モノを保存したり、鑑賞したり、商品化するのではなく、モノに組み込まれてる仕組みや技などの目に見えないカタチを遺し、人々の生活に根づかせながら、生きた記憶として永続させるアプローチから、新たなプロジェクトを創出することである。

今回、私たちは、それを構想し、実際に展開するマネジメントに焦点をあて、那須烏山市にある和紙 会館と和紙の里で、現地視察を行い、ヒヤリング調 香を実施した。

3 烏山和紙とは

程村紙(=鳥山和紙)は、飛鳥時代後半に帰化人により伝えられたとされており、1300年を超える歴史がある。

那珂川の清流と楮のみを原料にした手漉き和紙は、紙肌が緻密で、ことのほか丈夫な特性ゆえ、鎌倉時代には那須奉書が漉き出され、全国に那須紙として流通した。戦前戦中は、選挙用紙や風船爆弾に活用され、現在は、宮中歌会初めにも使用され、国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に指定されている。

4 和紙のミュージアム・プロジェクト

鳥山和紙会館は、奈良時代から伝わる鳥山手すき 和紙技術の唯一の継承者である福田弘平氏によって、 1968年に設立された和紙のミュージアムである。

高度成長期には烏山に1,000軒あった半農半匠の工房の多くは、大手製紙企業の下請けとなったが、規模のビジネスで疲弊し、福田和紙製作所一軒になってしまった。



烏山和紙会館



手漉き和紙の産地だからできる山あげ

福田氏は、鳥山に根づいてきた手漉き和紙の文化を継承していくためには、既存の紙産業と異なる新たなプロジェクトをたちあげなければならないことを痛感した。そして、大手製紙企業と決別し、鳥山に根づいていた和紙の文化を遺し、和紙の新しい文化を創造するミュージアム・プロジェクトに可能性をみいだし、地に足のついたミュージアム活動を展開してきた。

5 モノづくりから和紙の生活文化づくりへ

福田氏は、大手製紙企業の傘下に入って疲弊した 失敗を教訓に、一人ひとりの生活者とコミュニケー ションすることに力点をおき、手漉き和紙職人とし ての技を磨きあげながら、人々の暮らしに使われ、 暮らしを成長させる和紙の生活文化の普及に取り組 んだ。

独学で展示デザインを学習し、鳥山和紙のコレクション中心に、鳥山和紙の製造や特徴を解説する展示を製作した。「紙は、人々に思いを表現する大切なメッセージの媒体である」ということに着目し、手漉きならでは強みが活かせる便箋、はがき、小さな和紙のミュージアムグッズを開発し、自ら来館者に語りかけた。

来館者とのコミュニケーションを糸口に、新たに 色つき和紙に挑戦し、ミュージアムグッズを次々に 開発していった。

6 思い出を記録する手漉き和紙の卒業証書

来館者とのコミュニケーションから誕生し、和紙 会館の経営をゆるぎないものにした2つのプロジェ クトがある。

一つは、職人が一枚一枚手づくりで漉きあげ、一人ひとりの氏名を書き、あわせて、烏山和紙の歴史や手漉き和紙の特徴を記したメッセージカードをお届けする卒業証書プロジェクトである。

和紙会館で、特別な思いをメッセージする際に、 使う手紙やはがきに対する人々のこだわりあること を感じとった福田氏は、人々の思いや感動を記録す る卒業証書こそ、手漉き和紙の強みを訴求できる分 野であることに着目した。せめて日本有数の和紙の 産地であった鳥山の祖先の記憶を思い出してもらお うという目的で、鳥山町内の小中学校向けに、手漉 き和紙の卒業証書づくりに取り組んだ。鳥山町内か らスタートした職人が心を込めて漉きあげる卒業証 書プロジェクトは、人々の共感を引きおこし、栃木 県内の高等学校、そして全国の私立大学の卒業証書 にまで発展し、手漉き和紙のミュージアムグッズと して、まったく新しいマーケットの創出に成功した。

7 押絵プロジェクト 和紙を使った学習プログラム もう一つのプロジェクトは、「押絵」である。

「押絵」とは、「和紙で、人物・花鳥などの形を厚紙でつくり、これを布で包み中に綿を入れて作る」 創作芸術であり、福田氏が開発した学習プログラムである。

色つき和紙を使ってもらうためには、教育や学習 教材として活用してもらう必要がある。そのために



押絵の作品

は、和紙を使って絵を描きあげていき、それに喜び を感じることが出来るまったく新しいタイプの学習 プログラムが必要と考え、福田氏は、創造芸術の学 習プログラムの開発に着手した。

福田氏は、誰もが気軽に学ぶことが出来るように、押絵づくりの工程を整理し、学び方を明示したテキストを作成した。学ぶ人々が、習得したスキルやレベルを確認することができるように到達段階を明示した階位を策定した。学習成果を発表する展覧会を年一回開催し、受講者の交流と学習意欲を喚起した。

和紙会館の小さなコミュニティでスタートした押 絵の学習プログラムは、生涯学習時代の学びを先駆 けたものであった。その結果、1980年代には、全国の 社会教育施設から講座の問い合わせや要望が相次ぎ、 テキストの販売、原料となる和紙の販売、受講料は 飛躍的に増大し、全国規模の創作芸術に発展した。

8 コミュニケーションと学習による事業創造

和紙会館を中心に福田氏が展開してきたマネジメントをとおし、私たちは、次のことを発見することができる。

学習とコミュニケーションは、限りない成長が可能であり、より深いリレーションシップをつくりだすことができる。またそれを生活に結びつけることで新たなイノベーションのきっかけをあたえてくれる。

未来のミュージアムに求められる使命は、従来の 博物館経営でいわれてきたような集客、コレクショ ンや展示に力点をおいたものではない。それはまた、



手漉きの鳥山和紙で葉書づくりに挑戦する参加者

ビジネスでいわれてきたブランド化やマーケティン グでもなかった。

ミュージアムにおけるコミュニケーションと学習 活動を中心にした文化の普及と創造は、事業を育む 種となり、富の創造を可能にする。

9 未来ミュージアムへの挑戦

福田氏は、2007年に新たなミュージアム施設「和紙の里」を設立した。

護岸工事がされておらず、鳥山に恵みを与え続けてきてくれた那珂川の流れをしのぶことができる環境に立地している「和紙の里」では、庭に鳥山和紙の原料である楮畑もつくられており、半農半匠を特徴としてきた鳥山和紙の往事の姿が再現されている。「和紙の里」は、福田氏とその後継者らが手漉き和紙を創造する工房である。それとともに、ミュージアムでもある。ここは、来館者に職人の技を見てもらうとともに、職人と来館者がコミュニケーションする場として、手漉き和紙を体験することができる場として、そして鳥山に暮らしてきた人々の生きざまを体感できる場としてデザインされている。

「和紙の里」は、展示場、体験学習の場、工房を超えた、生活文化を創造する未来ミュージアムである。ここでは現在、「手漉き和紙と暮らし縁結び」をキーワードに、「押絵」に代わる新たな学習プログラムの開発が行われている。私達は今回の調査で、鳥山の「和紙の里」に未来のミュージアムの可能性を発見することができた。

支部会だより

北海道支部研修会報告

北海道支部長 土屋 周三 同事務局次長 中瀬 尚子

第一回研修会

北海道博物館協会では面積的に広範な地域性を 鑑み、活動の円滑化と推進を図るため北海道全域 を6ブロック(道南、道央、道北、道東、北網、 日胆)に区分している。第一回の研修会は下記の 要領で道南ブロックの研修会を後援する形で開催 した。

平成20年度

道南ブロック博物館施設等連絡協議会研修会・ 第一回日本ミュージアムマネージメント学会 北海道支部研修会

【期 日】 7月8日(火) 13:00~17:00

【会 場】 せたな町大成生涯学習センター

【参加者数】 20名

【テーマ】 社会教育と博物館(活動)

I 部:博物館法等の一部改正する法律の成立にと もなう社会教育活動の今後について

講師 日本ミュージアムマネージメント 学会北海道支部

支部長 土屋 周三氏

(小樽市総合博物館長)

Ⅱ部:フォーラム

ファシリティーター

八雲町郷土資料館学芸員 三浦 孝一氏



写真1:北海道支部土屋支部長の講演



写真2:熱心な討議が続いたフォーラム

I部:6月の博物館法が一部改正されたのを機会に 同法律の意義と内容、そして北海道内の博物 館園の現状と関わりについて研修した。

- ①博物館法にうたわれている「博物館」とは 当該都道府県育委員会の博物館登録原簿に 登録されている博物館(同法第2条)を指 すが、北海道内における登録博物館数が北 海道博物館協会加盟の館園数128(平成20 年10月現在)に対し37館園、未加盟館園を 含めても45館園と少なく、その背景を探る。
- ②法の改正内容について平成20年6月11日 付・20文科生第167号「社会教育法等の一 部を改正する法律等の施行について(通知)」 をもとに具体的改正内容を研修。

■部:講演内容をふまえてのフォーラム。 登録博物館の意義に発言が集中し、これまで 博物館法をよりどころにしてきた未登録博物 館に所属する学芸員にとっては、登録制度を 再認識する機会となった。また、なぜ博物館 登録しないのか、あるいはなぜ登録出来ない のかについて活発な意見が出された。

北海道の登録博物館

No.	博物館種別	施 設 の 名 称	No.	博物館種別	施 設 の 名 称
1	総合博物館	市立函館博物館	24	美術博物館	北海道立函館美術館
2	総合博物館	網走市立郷土博物館	25	総合博物館	美幌博物館
3	総合博物館	釧路市立博物館	26	歷史博物館	北方歴史資料館
4	総合博物館	小樽市総合博物館	27	歷史博物館	北海道立北方民族博物館
5	美術博物館	北海道立三岸好太郎美術館	28	美術博物館	北海道立帯広美術館
6	科学博物館	苫小牧市科学センター	29	美術博物館	荒井記念美術館
7	歷史博物館	浦河町立郷土博物館	30	総合博物館	旭川市博物館
8	美術博物館	網走市立美術館	31	美術博物館	中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館
9	科学博物館	上士幌町ひがし大雪博物館	32	総合博物館	留萌市海のふるさと館
10	美術博物館	北海道立近代美術館	33	歷史博物館	北海道立文学館
11	総合博物館	斜里町立知床博物館	34	歷史博物館	博物館網走監獄
12	総合博物館	三笠市立博物館	35	歴史博物館	名寄市北国博物館
13	歷史博物館	利尻町立博物館	36	歷史博物館	三浦綾子記念文学館
14	総合博物館	士別市立博物館	37	美術博物館	北海道立釧路芸術館
15	科学博物館	札幌市青少年科学館	38	歷史博物館	厚岸町海事記念館
16	歷史博物館	市立小樽文学館	39	美術博物館	北一ヴェネツィア美術館
17	美術博物館	市立小樽美術館	40	美術博物館	釧路市美術館
18	水族館	サンピアザ水族館	41	総合博物館	帯広百年記念館
19	総合博物館	むかわ町立穂別博物館	42	総合博物館	紋別市立博物館
20	美術博物館	北海道立旭川美術館	43	科学博物館	日高山脈館
21	歷史博物館	アイヌ民族博物館	44	科学博物館	旭川市科学館
22	科学博物館	広尾町海洋博物館	45	歷史博物館	平取町立二風谷アイヌ文化博物館
23	総合博物館	苫小牧市博物館			

第二回研修会(北海道博物館協会共催)

【期 日】 平成20年10月23日(木)·24日(金)

【会場】とままえ温泉ふわっと

(苫前郡苫前町字苫前119-1)

【参加者数】 40名

【テーマ】 自然と地域と人と博物館

【開催主旨】

近年、地方博物館を取り巻く社会環境は大きく変化した。利用者ニーズの多様化への対応、厳しい財政事情や行政改革の中での運営に苦労し、展望を見出そうと努力している博物館園は多い。

博物館が担うべき役割を見つめ直す中で、利用者・市民と共に歩み、市民と共に考え行動する博物館活動が注目されている。市民に支持され親しまれる「魅力ある博物館」、そして「魅力ある活動」とは何か、自然と地域と人と博物館のつながりから考える。

〈第一日目 10月23日(木)〉

【プログラム】

●基調講演 「博物館と人」

北海道開拓記念館館長·北海道博物館協会会長 丹保 憲仁 氏

●事例発表

①「自然と地域」

地域の自然と博物館〜自然と地域は一体 〜博物館活動から地域づくりへ 中川町エコミュージアムセンター 学芸員 疋田 吉識 氏

②「人と博物館」

ボランティアから特別学芸員へ

〜特別学芸員制度と博物館ボランティア〜 士別市立博物館

主幹(学芸員) 水田 一彦 氏

③「地域と博物館|

地域から「収集した」博物館資料を地域に 「返す」方法のひとつとして

留萌市海のふるさと館

学芸員 高橋 勝也氏

●討 議

【報告】

基調講演では、丹保館長より、これからの博物館のあり方について、大局的な見地から熱い講義が展開された。まず、「博物館を利用している変な生き物人間」という言葉で軽く先制パンチ。さらに「エコロジーとヒューマニズムの相反」「他の生物と共生しがたい"人間圏"をつくってしまった」「共生=共死」など次々とインパクトのある言葉が繰り出された。科学技術が先導し、エネルギーと資源の大量消費による成長社会が賞賛された時代は過ぎ去り、新たな倫理の構築や価値の創造が求められる21世紀の知的社会において、博物館はどのような役割を果たしていくのか、博物館の資料はどのような価値をもつのか、その位置決めをどのように行っていくのか、大きな課題が提起された。

事例発表では、地方の博物館において、市民と共 に奮闘する学芸員の方々から具体的な報告がなされ た。

中川町エコミュージアムセンターの疋田学芸員からは、博物館活動が地域づくりへと発展していく事例が紹介された。中川町はアンモナイトなどの化石が有名だが、センターでは自然と密着した地域文化全体を視野に入れ、町民とともに新たな地域の魅力を発掘している。特に、地元の主婦の方々による食文化の発信・伝承と、さらに学芸員による学術的裏づけを合わせた普及・研修事業が成果をあげている。博物館活動によって地域のアイデンティティーが蓄積され、博物館に集う人材が地域づくりのリーダーとなりつつある。

士別市立博物館の水田主幹からは、市民と共に博物館を支持する体制をつくり、多彩な特別展示や体験学習会を開催している活動報告があった。士別市立博物館では「特別学芸員制度」を設け、専門的な技術や学識を持つ方々が学芸員として活動している。



写真3:北海道博物館協会丹保会長の基調講演



写真4:講師を交えた討議

その他、「博物館ボランティア友の会」に20名の市 民が登録している。また、市の他の部局や機関との 連携も意識して行われている。

留萌市海のふるさと館の高橋学芸員からは、収蔵 資料を学校教育に活用している事例が発表された。 昔の農機具や漁具、生活の道具など、収蔵資料をも とに学習プログラムが組まれ、道具の移り変わりな どを学ぶ授業が実践されている。また、劇の小道具 として資料を貸し出したり、出前授業を行ったり、 資料活用の幅を広げながら地域とのつながりを深め ている。

討議では、従来どおりの博物館業務のみならず、 公共の施設として、広く地域の発展にも貢献が求め られている地方博物館の現状や課題があらためて認 識された。また、北海道の施設ならではと思われる 冬期閉鎖の功罪、地域文化を担う住民の高齢化など についても意見が交わされた。

〈第二日目 10月24日(金)〉 【プログラム】

●施設見学

- ①苫前町郷土資料館・考古資料館・復元住居(苫 前町)
- ②重要文化財 旧花田家番屋(小平町)
- ③北海道海鳥センター (羽幌町)

【報告】

二日目は、道北地区にある3つの施設をバスで巡回した。

苫前町郷土資料館では、農業や漁業、生活全般に関するさまざまな道具を豊富に展示している。大正時代に熊が次々と民家を襲ったという「三毛別(三渓)のヒグマ事件」のジオラマが見所だった(この事件は小説やドラマにもなっている)。屋外には、縄文時代の家・擦文時代の家・アイヌのチセが復元されている。



写真5: 苫前町郷土資料館

旧花田家番屋は、道内屈指の鰊漁家である花田家が明治後期に建てたもので、鰊漁で賑わった明治~大正期を偲ばせる文化財である。当時は総勢200人前後の漁夫や職人を収容していたという。ひとつひとつの部屋や道具について、小平町の方に大変丁寧に解説していただき、普通は見学できない部屋も案内していただいた。



写真6:北海道海鳥センター

北海道海鳥センターは、天売島を中心とした海鳥の調査・研究、環境教育を行っており、環境省と羽幌町が運営している。子どもたちがレンジャーとして積極的に活動しており、館内には、子どもたちが調べ、学習した成果や活動報告などが多数展示されていた。また、工夫をこらした手作りの展示アイテムもユニークだった。

東北支部研究会報告

JMMA東北支部事務局 向井田善朗

テーマ:ミュージアムツアープランの組み立て方

日 時: 平成20年9月13日(土) 午後1時より

場所:岩手大学農学部

講 師:佐藤 宏(岩手県文化財愛護協会 会長) 伊勢 裕次(㈱ワールドトラベル盛岡支店長)

はじめに

JMMA東北支部では、平成20年度の行事として 2 回の研究会を計画し、第 1 回目の研究会を平成20年 9 月13日、「ミュージアムツアーの組み立て方」を テーマとして岩手大学農学部を会場に開催した。副 題を「ミュージアム見学を中心とした旅行プランの 可能性について、旅行会社の視点から見る」とし、 岩手県立博物館友の会有志による「シルクロード研 修旅行」を事例として意見交換を行った。

シルクロード研修旅行について(佐藤 宏 氏) きっかけ

岩手県立博物館は1980年10月に開館した総合博物



佐藤講師

館である。開館時から友の会構想があり、2年間の 準備を経て1990年に設立された。会員数は一般・家 族会員・小中高生合わせて約900名である(2007年)。 現地見学会、自然観察会、話のサロンなどを活動の 柱とし、現地見学会は年3回実施され、そのうち2 回は県外への宿泊研修を行っている。

研	鮗	旅	구	ന	枳	要

	訪問国	訪 問 地	訪問施設数	旅行期間	人数
第1次	中国	北京, 西安など 3 箇所	5 箇所	1995/3/28~4/4	28人
第2次	中国	敦煌, 鳥魯木斎など 4 箇所	5	1998/10/6~10/14	27
第3次	中国	庫車, 喀什など 6 箇所	4	2000/8/23~9/2	21
第4次	中国	タシクルガンなど11箇所	6	2001/8/24~9	15
	パキスタン				
第5次	中国	新疆ウイグル自治区,アルマトイ,	9	2002/10/7~10/19	17
	カザフスタン	ウルゲンチなど8箇所			
	ウズベキスタン				
第6次	ウズベキスタン	ブハラ,メルヴ,シラーズなど	15	2004/10/29~11/13	13
	トルクメニスタン	11箇所			
	イラン				
第7次	カタール	テヘラン,アレッポなど12箇所	10	2005/10/29~11/13	13
	イラン				
	シリア				
第8次	UAE	ドバイ,アンカラなど10箇所	15	2006/8/28~9/12	21
	トルコ				
第9次	キプロス	ニコシア,ギルネ,アテネなど	12	2007/10/2~10/14	18
	ギリシャ	14箇所			

1992年に現地見学会の延長として韓国への研修旅行を実施した(5か所の施設を訪問)。参加者は14名と少なかったが、報告会において、参加者の中からシルクロードへの研修旅行を望む声が出され、有志によって計画されることとなった。計画に当たっては、海外旅行のために旅行費用が国内の場合よりも高額になること、長期の休暇を取れる会員が少ないこと、不測の事態が起きた場合などを考慮し、友の会全体ではなく、有志による事業とした。

(2) 研修旅行の内容

第1回から9回までの研修旅行内容と訪問施設を表に示す。1995年の第1回研修から2007年の第9回研修までに訪問した国は中国、パキスタン、カザフスタンなど12カ国に及ぶ。訪問した主な都市・地域は、中国の大連からギリシャのアテネまで合計78ヵ所である。また、訪問した博物館・遺跡は、故宮博物院(中国)はじめ、日本人抑留記念館(ウズベキスタン)など57施設である。ユネスコ世界遺産への訪問は万里の長城(中国)、メテオラ(ギリシャ)など34ヶ所である。旅行日数は延べ113日、1回平均13日であった。

2001年の同時多発テロ以後少し減ってはいるものの、延べ173人、1回平均19名が参加している。第1回から9回までの全てに参加した会員は4名である。

9回の研修旅行を通して共通しているのは、博物館を主たる訪問先としたことと、訪問先を結ぶ移動

をバスによる陸路としたことである。

訪問した博物館では正式な受け入れ団体として、館長もしくはそれに準ずるスタッフの対応が得られた。また、地域の人々や生活・文化に触れる機会が多く得られ、訪問先の博物館の紹介によって、一般家庭への訪問(トルファンやトルコ国内など 5 回)や、訪問先家族との昼食会(ウズベキスタン)を行うことができた。さらに、目的地までの移動の途中でも、現地の結婚式に出会ってお祝いに招かれるなど、予定していなかった地域との触れ合いの機会も多かった。ミュージアムや遺跡への訪問に加えて、このような体験ができたことが次回以降への参加の動機付けとなったと、参加者の多くが述べている。

2. 旅行の組み立て方(伊勢裕次氏)

(1) 計画

研修旅行は3月や8月に行われる場合もあるが、概ね10月を中心に行われる。旅行終了後報告会が行われ、その席で参加者から次回の希望がいくつか出される。それらをもとに次回の団長・副団長候補と旅行社による情報収集と検討会が3回程度行われ、次の年の3月頃までに2~3の案が作られる。その後、過去の参加者などを中心としたメンバー(10人程度)を交えて検討し、ゴールデンウイーク頃までにひとつの案にまとめられ、参加者の募集が行なわれる。



伊勢講師

(2) 準備

旅行計画が決まり、訪問先が確定すると、出発日に備えてほぼ毎月学習会が行われる。この段階で必要に応じて学芸員が同席し、アドバイスを受ける場合がある。出発に先立って岩手県立博物館館長名で、英文と和文の正式な依頼文書が郵送とFAXでそれぞれの訪問先の館長宛てに送られる。また、依頼文書が届かない場合も考えて直接団長が依頼文書を持参している。参加者の希望によって、出発前に訪問する博物館に対して、現地の生活に触れることが研修の目的の一つであることを伝え、一般家庭への訪問の設定を依頼する場合もある。



結婚式

(3) 実施

団長、副団長、会計係を設け、研修旅行期間中は概ね5~6名の班に分けて行動している。60歳以上の参加者が多いために旅行日数は概ね2週間以内とし、主に宿泊はホテル、昼食はレストランを利用した。1日の行動は概ね午前8時半行動開始、午後6時宿泊地到着を原則とし、訪問施設は基本的に1日1か所としている。旅行期間中、できるだけ地域の生活・文化に直接触れたいという理由から、飛行機や鉄道がある場合でも移動手段は基本的にバスとした。また旅行中の安全確保を最優先することとした(カイバル峠では2名の民兵が同行)。



旅行集合写真

3. ミュージアムを中心としたツアーの意義 —全体討論から—

(1) シルクロード研修旅行の特徴

このように9回継続され、平均19名の参加が得られた有志の会による研修旅行の意義について、全体討論の中で出された意見をもとに整理すると、以下の3点にまとめることが出来る。

第一点は、企画・運営を友の会有志で行ったことである。そのために参加予定者の希望が多く反映された。さらに出発までの数度にわたる学習活動によって、訪問地に関する予備知識が得られ、全員が同じ情報を共有できた。この学習活動を通して、研修旅行の方向性が固まり、さらにメンバーシップが作られて行く効果が得られた。

第二点は、有志による独自の企画である一方で、博物館との友好的な関係を保った上で企画・実行されたことである。博物館から正式な依頼がなされているために、訪問先の博物館では公式訪問として旅行団を迎え、館長または学芸員の正式な対応が得られている。参加者は、事前の学習活動に加え、施設のスタッフからの詳しい説明が受けられたことで、その地域の歴史・生活・文化・自然などを総合的に理解することが出来た。これは一般の観光ツアーでは経験することができない内容であった。

第三点は、旅行の移動中も含めて地域の生活・文化に触れることを目的の一つに位置付けた点である。博物館や遺跡への訪問のみにとどまらず、地域の生活・文化・人々との触れ合いを大事にした。これらの手配には、訪問先の博物館スタッフが行なうことが多かった。また、訪問先と訪問先を陸路でつなぎ、移動にバスを利用しているために、移動の途中でその土地の生活文化に触れる機会が多かった。岩手県立博物館友の会有志によるシルクロード研修旅行は、単なる観光旅行でもなく、単なる施設の見学だけでもない、新しい旅のスタイルとしてのミュージアムツアーを体現したといえよう。

(2) 新しい旅のスタイルと博物館の可能性

近年、新しい博物館としてエコミュージアムが注目されている。わが国でも山形県朝日町をはじめ、いくつかの地域で取り組まれている。それらの多くは地域の歴史・文化・生活環境・自然などを、新たな地域資源として見直し、観光などに活用することが試みられている。シルクロード研修旅行もまた、博物館の訪問のみに止まらず、地域の生活・文化に触れることを旅行の目的の一つとし、限られた範囲



全体討論

ではあるが訪問先の博物館がその希望に応えてくれた。地域資源に関する情報の宝庫でもある博物館が、もしそのようなサービスを提供できるとすれば、地域の活性化に貢献しうる可能性は大きいのではないだろうか。

たとえば、博物館が来館者の希望に応じて、宿泊の斡旋や博物館展示の背景となっている地域の生活・文化に直接触れることができるようなメニューを用意することが可能であろうか。言うまでもなく、わが国の博物館は社会教育施設の一つであり、その中心的役割は人々の生涯学習を支援することにある。さらに多くの博物館ではスタッフの数は限られており、現状では難しいであろう。しかし、岩手県立博物館友の会有志のようなメンバーが、実際に国内外の博物館を訪問することで得られた経験をもとに、新しい事業の担い手となりうるとすれば、その可能性はより現実的なものとなるであろう。

もちろん、友の会が計画する事業は博物館当局の参加と合意が必要であり(「友の会とボランティアの倫理規定」―WFFMによる倫理規定の策定と活動―: JMMA会報No.43. Vol. 11)、博物館とのパートナーシップが最も重要であることは言うまでもない。

- 注1) 研修旅行に関する資料は佐藤宏氏による。
- 注2) 旅行中の写真は伊勢裕次氏の提供による。
- 注3) 本レポートは研究会での講演内容に後日聞き 取り調査によって得られた内容を加えて作成 した。
- 注4) 研究会終了後第10回目の研修旅行が実施された (10/2~13、ギリシャ~ローマ、19名参加)。



ミュージアムを核としたネットワークや町づくりの話題、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネージメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

横浜トリエンナーレ 一クリエイティブシティ (文化創造芸術都市)を歩く―

文化環境研究所 山城 弥生

3年に一度、横浜で行われる現代アートの国際展、横浜トリエンナーレを訪れた。3回目となる今回のテーマは「Time Crevasse タイムクレバス(時の裂目)」。世界25の国と地域から72名のアーティストが参加し映像や立体、絵画や写真、インスタレーション等の作品の展示や、パフォーマンスやコンサート、シンポジウムをはじめ、ワークショップやギャラリートークなどが数多く行なわれた。

メイン会場は新港ピア、日本郵船海岸通倉庫(BankART Studio NYK)、横浜赤レンガ倉庫1号館の3つ、その他の会場に三渓園、大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザ、運河パークがある。三渓園をのぞく6つの会場が横浜市のクリエイティブシティ(文化芸術創造都市)の拠点地域である新港・馬車道地区、大さん橋・日本大通り地区にある。

今回、開催された横浜トリエンナーレは、横浜市のクリエイティブシティのプロジェクトの一つとして位置づけられている。

横浜トリエンナーレと連動し「BankART Life II」が同時期に開催され、横浜トリエンナーレと共通のお得なチケット(通常は1,800円〈横浜トリエンナーレー般〉+900円〈BankART Life II 一般〉=2,700円の所、共通チケット一般は2,100円)が発売されていた。その他にも京浜急行 黄金町駅から日ノ出町駅周辺で、アートイベント「黄金町バザール」が開催された。

■クリエイティブシティ

馬車道・新港地区 大さん橋・日本大通り地区

馬車道・新港地区では、横浜開港時代から昭和 初期にかけて建てられた歴史的建築物などの地域 資源を活用し、文化・芸術の創造・発信を行なう。 BankARTの活動拠点として現在使用されている1929 年に建てられた旧第一銀行や、BankART Studio NYK が運営するアートスペースである日本郵船海岸倉庫、 東京藝術大学大学院映像研究科校舎となった旧富士 銀行と新港客船ターミナルなどが、いずれも歩いて まわれる距離間にある。

さあ、出発!!

街に点在する歴史的建築物や港町の風景が、アート を媒介に横(空間軸)につながる。

博物館等の文化施設もこの地区に多くある。開港 当時整備された馬車道や日本大通りを歩きながら、神奈川県立歴史博物館、横浜開港資料館、横浜市開 港記念会館、横浜ユーラシア文化館・横浜都市発展 記念館を通る。港湾や運河の景観を眺めながら、横 浜の歴史や文化にふれる。

チケットは2日間有効(連続していない日も可能)になっており、メイン会場を中心に街を歩くルートや、少し離れた三渓園までバスで移動するルートを決める。会場から会場へと行く間に横浜を観光する。

みなとみらい線 馬車道駅から海の方角へ、約1km 四方のエリアに散らばる会場を徒歩で移動する。日本大通りや赤レンガ倉庫前の赤レンガパークなどのオープンスペースで行われる全国物産展などのイベントを通り過ぎ、運河、埠頭、港湾、倉庫、昭和初期の建築物、街路樹、国際客船、フェリー、潮風、海、明治の建築物のある街を歩く。歩く事により、街を認識し記憶する。アートを媒介にそれぞれの風景、文化、歴史がつながり、横浜の都市の魅力が自分の記憶に浮かび上がる。

長年積み重ねてきた創造のクラスター(集積)が街 を縦(歴史軸)につなぐ。

横浜市では、1971年に都市デザイン担当を設置して以来、37年間継続的に都市デザイン活動に取り組んでいる。2006年には「横浜市の一連の都市デザイン」がグッドデザイン金賞を受賞した。

横浜市都市整備局ホームページに都市デザインの 目標について次のようにある。 「他の都市とは異なる横浜独自の魅力ある都市空間の形成」を目標とし、次の7つの視点をもって、さまざまな街づくり事業の企画・調整、公共施設のデザイン調整などを行っている。(1)歩行活動を擁護し、安全で快適な歩行者空間を確保する。(2)地域の地形や植生などの自然的特徴を大切にする。(3)地域の歴史的、文化的資産を大切にする。(4)オープンスペースや緑を豊かにする。(5)海、川などの水辺空間を大切にする。(6)人々がふれあえる場、コミュニケーションの場を増やす。(7)形態的、視覚的美しさを求める。

今回、横浜トリエンナーレ開催中の横浜を2日間歩く事により、充分に7つの視点を感じることができた。

横浜市は近年、来年(2009年)が開港150周年となるのを契機に、クリエイティブシティ ヨコハマという観点から、公と民間と市民が一緒になって文化事業、経済活動を活性化する街づくりに取り組んでいる。その一つとして、横浜市はアーティストやクリエイターのための事務所、企業の文化事業やCSR活動、映画系産業、映像コンテンツ制作企業や教育機関等の活動を助成・補助し積極的に誘致を行っている。

街のいたる所に美意識を感じる。みなとみらい線 馬車道駅は、壁にレンガが使われておりきれいで趣 がある。日本大通りは道幅が広く、オープンカフェ があり、通り沿いにあるレストランは、天井の高い 古い建築物を活かした、おしゃれなお店になってい る。クラスター(集積)と言う言葉が、クリエイティブシティのコンセプトにあるが、公や民間、市民 の活動の一つ一つを積み重ねて、都市を相乗的に作



横浜開港資料館(1931年建設)



横浜開港資料館 たまくすの木



それぞれの会場には番号がつけられ、仮囲いに緑の文字で会場案内のサインがでていた。各会場の外壁や入口にも同じく番号が表示されていた。①は新港ピア、②は赤レンガ倉庫1号館、③は日本郵船海岸通倉庫「BankART Studio NYK」

りあげて行くということが肌で感じられる。それは、 横浜市が37年前から継続的に都市デザインの活動に 取り組んで来た地盤があるからこそできる事と感じ られた。

■メイン会場①の新港ピアには、多様な情動のアートシーンが広がっていた。

横浜埠頭に横浜市が新たに建設した新港ピアは、 今年の夏に完成し、今回の横浜トリエンナーレがこけら落としとなる。白く塗装された板の壁で四方を囲われた18個のハコ型の展示室に30名のアーティストの作品が展示される。ハコは作品にあわせ大小があり、壁の高さや大きさが異なる。最初の部屋から突き当たりまで、展示室の入口がまっすぐに貫かれており、突き当りの海まで見通せる。建物の側面にいくつかある出入り口は開け放されており、展示室を巡



新港ピア

る通路からは外が見え、また風が入るなど開放的な 展示スペースとなっている。展示スペースには動線 がなく、人々は好きな作品を鑑賞し、ハコの裏方に 設置された椅子で休憩をする。

仮設空間に根をはるインスタレーションが生物のように映える。

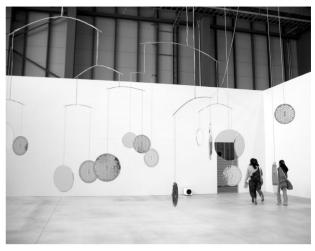
トリエンナーレの期間中の約3ヶ月間の展示のために作られた展示スペースは、美術館などの展示室に比べ、創造性豊かな可能性を感じさせた。白く塗装された壁で構成され、裏側は塗装されず、来観者にも隠さず見せているので、容易に取り外す事が可能なように感じさせる。港湾の景色と風と光を取り込み、それぞれの作品にあわせて造形化・心象化さ



新港ピア 作品より

白木の箱の上にグレーのクッションが置かれている。壁にかけられたスピーカーからは音が響く。スピーカーは2箇所にあり一つはそれぞれのスピーカーから別々の音が出て和音になる。もう一つは旋律を奏でる。和音と旋律はある時は重なり調和し、ある時はリズムが離れて個々に主張をする。

れた展示シーンは、そこでしか出会うことのできない期間限定の作品である。



新港ピア 作品より

円形の鏡に、白い設営会場が写る。白のイメージが強い作品であるが、展示される場所により、イメージが変わってくるのだと思った。円形の鏡はモビールになっていてバランスがとれている。宙に浮かぶ円に映り込む様々なもの。

■メイン会場②の赤レンガ倉庫1号館前のオープンスペースでは多様なコミュニケーションがアート会場を賑せていた。



メイン会場の一つである横浜赤レンガ倉庫は、明治の終わりから大正時代の初めにかけて建てられた建築物である。国営保税倉庫として1989年まで活躍した。建物自体に力がある。現在は、1号館がイベント等を行なう文化スペースとして、2号館は主に商業スペースとして利用される。

赤レンガ倉庫は古くからの横浜の顔であり、普段より市民になじみのある場である。赤レンガパークでは、ドイツのビール祭りオクトーバーフェストが



赤レンガ倉庫1号館 作品より

螺旋の外側より坂を内側へと上る。小さなハシゴのような 階段を登ると円形の広場がある。子どもたちがとても喜びな がらくるくると登って行き、円の広場で走り回る。木の板の 上を歩く足音が印象的。大人も子ども同様に楽しい。デジカ メで作品を熱心に撮影する子どもがいた。





赤レンガ倉庫1号館 作品より 白い壁に囲われた部屋に展示されている平面作品。一つの 絵を見る。全体を見る。不思議な部屋の中。

行われ、多くの人で賑わっていた。横浜市では、オープンスペースを利用した人々のふれあいやコミュニケーションの場を作るイベントが多く行なわれている。

■メイン会場③の日本郵船海岸通倉庫「BankART Studio NYK」は、コンクリートの打ちっぱなしが特異な雰囲気を醸し出していた。

日本郵船海岸通倉庫は、1952年に建てられた運河 に臨む物流倉庫である。現在はBankART 1929の拠 点施設の一つであり「BankART Studio NYK」が運 営をするアートスペースとなっている。

1階の一部と2階、3階に20作品を展示。3階は、 倉庫として使われていたコンクリートの打ちっぱな しのスペースをそのまま展示空間として活かし複数 のアーティストの作品を展示する。



コンクリートの柱がとても存在感がある。天窓から壁の厚み が分かる。



コンクリートの床に何かの円い跡



運河パーク 作品より

屋外に設営された作品。球体の中に入る事ができる。球体 の中では音楽のパフォーマンスが行われ、球体の中と外の両 方で作品を鑑賞する。

■大さん橋国際客船ターミナルは、エルメステイストでピノキオ気分。

国際コンペにより選ばれたロンドン在住の2人の建築家による設計で2002年に竣工した現代建築である。ウッドデッキは、ロビーのある2階部分と屋上部分、通路などすべてに統一されており、ゆるやかな波を描くような曲線が連続する板は、外と中をそのままつなぐ線となる。くじらの口のように開く入口から、2階ロビーに入る。くじらのおなかと呼ばれる柱のない空間に、くじらの肋骨をデザインしたような天井の梁が横のリズムをつくる。

くじらのせなかと名前のついた屋上は緩やかに傾斜する2つの山になっており、屋上広場とイベント広場がある。ここもまた、人々がふれあえる場、コミュニケーションの場となっている。

2階ロビーに設営されたエルメスの可動式映写室 HBOXのなかで、世界各地8名の作家の映像作品を 上映する。BOXの中は小さなスペースで、定員が10 名程度。椅子やソファに座り、映像を鑑賞した。

(調査日:2008年10月5日(日)、11月2日(日))



大さん橋国際客船ターミナル2階ロビーの入り口



"横浜三塔"

キングは神奈川県庁、ジャックは横浜市開港記念会館、クイーンは横浜税関。ここから三塔を一望できる。(大さん橋屋上から)



くじらのせなかの愛称の屋上から新港・馬車道地区を望む。

揭示板

日中韓博物館円卓会議の開催(予告)

日 時 2009年2月11日 (水/祝日) 午後1時から5時まで

場 所 東京国立博物館(東京都台東区上野公園13-9)

テーマ 博物館の国際化と東アジアの博物館連携の在り方を考える

─日・中・韓3カ国博物館円卓会議─

講師(予定)

◆ 韓国

- (1) 韓国博物館協会会長 Ki-dong Bae キ・ド・ベ
- (2) ICOM / ASPAC委員長 Inkyung Chang インキュン・チャン

◆中国

- (1) 中国博物館学会会長 (ICOM中国委員長) Zhang Wenbin ザン・ウェンビン
- (2) ICOM中国委員会(中国博物館学会副会長) An Laishun アン・ライ・シャン Deputy Secretary General of Chinese Society of Museums, Academic Secretary, ICOM China

◆日本

- (1) JMMA会長(長崎歴史文化博物館館長)大堀 哲
- (2) JMMA理事(常磐大学大学院研究科長·教授) 水嶋 英治

特別ゲスト(予定)
ラオス情報文化省文化遺産局(ICOMラオス国内委員会委員長)

Thongsa Sayavongkhamdy トンサ・サヤフォンカムディ

主催 文化環境研究所

共 催 日本ミュージアム・マネージメント学会

協力 中国博物館学会 韓国博物館協会

後 援 全日本博物館学会

背景と趣旨

新しい博物館の在り方について、しばしばキーワードとして登場するのが「国際化」である。 日本の個々の博物館は、「姉妹館」提携のように諸外国の博物館と連携し積極的に国際化を推進 している館も見られるが、国全体として見ればまだ少数派である。日本の博物館の活動領域を広 げ、質を高めていくためにはやはり「国際化」は避けて通ることのできないテーマであろう。

昨年(2008)2月に、文部科学省の招聘によって来日した韓国博物館協会べ会長とICOM-ASPAC (アジア太平洋地域連盟)のチャン委員長は、今後の日本との国際連携について、次のように提言している。すなわち、「日本と韓国・中国がアジア諸国においてリーダーシップを発揮し、両国のイニシアチィブによってアジア諸国の博物館および博物館専門職の人材養成プログラムの開発に着手すべきである」と。

この提言を受けて、具体的なテーマをもとに、議論を展開し、協議する機会を設定することは、本学会にとっても極めて重要であり、また学会のみならず日本全国の博物館の国際化を推進するうえにおいても有効である。

今回、文部科学省の委託研究である「地域と共に歩む博物館育成事業 博物館支援策にかかる 各国等比較調査研究」の一環の中で、上記のような会議の場を設定し、日中韓の3カ国の連携強 化について、また今後のアジア太平洋諸国の博物館と連携のあり方、国際化の問題について様々 な角度から議論したいと考えている。

1 nformation

◆年会費納入のお願い

年会費が未納の方は下記口座までお早めに納入下さいますようお願い申し上げます。

請求書・領収証等が必要な方は事務局までご連絡下さい。

なお、個人会員の皆様は、トラブル防止のため、お振込の際は必ずご登録のお名前を明記のうえ、ご 入金下さい。

郵便局の場合 口座番号 00160-9-123703

「日本ミュージアム・マネージメント学会」

銀行の場合 みずほ銀行 稲荷町支店 普通預金 No.1740890

「日本ミュージアム・マネージメント学会」

◆文献寄贈のお知らせ

- ・21世紀の科学教育を創造する会『21世紀型科学教育の創造 V』
- ・財団法人多摩市文化振興財団 (パルテノン多摩)

『パルテノン多摩 博物館部門 研究紀要 Vol. 10』

『パルテノン多摩 資料叢書第3集 太田伊三郎家文書

―多摩市一ノ宮小野神社旧神主家の文書群』

noitsm rota

新規入会者のご紹介

【個人会員】

髙橋 修 山梨県立博物館

漁 剛志 山口県立山口博物館

平野 秀治 東京家政学院大学

(五十音順・敬称略)

JMMA会報 No. 50 (Vol. 13 no. 3)

発行日 2008年12月31日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、津久井真美 e-mail: kanri@jmma-net.jp